

最優秀賞

神奈川県教育長賞

知ることの大切さ

伊勢原市立伊勢原中学校

一年 辻本 耀清

僕の祖父のかばんには、いつも同じカードタイプのキーホルダーが付いている。スイスの国旗に似ていてハートのマークまで付いている。赤色であまりにも目立つので一緒にいる時は気恥ずかしくて祖父には内緒で見えない様に隠した事もある。ずっとただの飾りだと思っていたから、ある時に同じ物を付けている人を見かけた時、僕は驚いた。正直、小学生だった僕は「よくあんな派手なキーホルダーを付けれるな。」と思っていた。中学生になり部活で電車に乗る事が増えた。そうすると祖父と同じあの赤いキーホルダーを付けている人が多くいる事に気付いた。不思議に思い、その事を祖父に伝えた。そうすると祖父はパンフレットを見せながら説明してくれた。あの赤いキーホルダーには「ヘルプマーク」という名前が付

いていた。義足や人工関節を使用している人、内部障害や難病の人、妊娠初期の人など援助や配慮を必要としている人が持つっていると教わった。

僕が小学三年生の時に祖父は心臓の手術をした。医師は小学生の僕にもわかる様に優しく説明してくれた。心臓弁膜症とそれによる合併症だった。その病気がどれだけ危険なものなのか、その手術がどのくらい大変なものなのかも丁寧に教えてくれた。その時は祖父が死んでしまうのではないかと不安になり僕は泣いた。そんな僕に医師は「先生は手術を頑張る。おじいちゃんは生きる事を頑張る。だから君は退院した後のサポートを頑張ってほしい。」と言ってくれた。手術から退院までは一ヶ月くらいで思っていたよりも早かった様に思う。ただ退院してきた時の衝撃は今でも忘れられない。僕にとっては熊の様に大きかった祖父が痩せてガリガリになっていた。いつも僕が泣きべそをかくまでキャッチボールをさせてきた祖父が瘦血な祖父が歩くのもやっとな状態だった。その姿を見た僕は悲しくて、しばらく祖父の目を見て話ができなかった。

僕と祖父はリハビリだと言っては一緒に散歩をした。医師に言われた様に僕はサポートしなかった。あれから四年が経ち今でも行動は周りに比べたら遅いけれど、病気の事を時々忘れてしまうくらい元気になってくれた。ヘルプマークの意味を知った時、内部障害という言葉を初めて知った。確か、祖父が目に見えて弱っていた時には周りの人もとても優しくかった。しかし元気になり自由に出かけられる様になった時、祖父と世間の動けるスピードの違いは大きく、祖父が迷惑かけまいと慌てる姿を何度も見た。もたつく祖父にイライラした態度の

人もいた。小学生だった僕は「おじいちゃんは病気なんだから仕方がないじゃないか」と頭にきていた。しかし今思うと世間の人は祖父が病気だと知るはずもない。そこで僕はヘルプマークの持つ意味の大切さに、やっと気が付いた。それと同時に、家族の僕でさえ、ずっとヘルプマークの意味を知らなかった事がショックだった。もっとたくさんの人にヘルプマークを知ってほしい。駅や商業施設にポスターを貼り、学校の道徳などでもやってほしいと思った。祖父の様な病気だけではなく、難病や妊娠初期、精神障害の人も見ただけでは分からない。だからこそ、付けているヘルプマーク。でもそのヘルプマークの意味をみんなが知らなくては意味がない。

福祉はまず知る事から始まると僕は思う。誰だって病気、障害、高齢者などが家族や身近にいないければ知る機会がなかなかない。でもその意味と存在を知る事ができれば意識が変わると思う。あの赤くて派手なキーホルダーの大切な意味を僕は周りの人に伝えていきたい。